

特集

福音の

豊かさを知る



KGK九州地区責任主事
松尾 献
明星大06年卒

「この福音は、あなたがたが神の恵みを聞いて本当に理解したとき以来、世界中で起こっているように、あなたがたの間でも実を結び成長しています。」
(コロサイ1：6)



●「神学なんて」という声

「神学なんてしたら頭でっかちの信仰になるんじゃない?!」

「神学するより、聖書そのものをもっと、ちゃんと読もうよ。それで十分でしょ。」

「神学なんて献身者のためのものではない?」

学生時代の僕は、神学を馬鹿にしていた。

でも本当は、そうじゃない。ドキドキしていた自分がいたのだと思う。それは、聖書や信仰に関する疑問を本気で聖書にぶつけていったら、「自分の信仰はどうなっちゃうのだろう：。」というドキドキだ。

「神様が、何でも知っているなら、どうしてエデンの園の中央に善悪を知る木Vなんて置いたのだろうか。神様はもしかして意地悪!?!」

「神様が愛なら、なぜ世界に悲しいことがあるのだろうか。」

「本当にキリスト教だけが本物なの?実は他の宗教も本物じゃない?」

「なぜ人は、救われても罪を犯すのだろうか。実は、僕救われていない!?!」

これまでの信仰生活の中で生まれてきたモヤモヤ。そして、そのモヤモヤに「信仰」という蓋を押し込んで、何とかやりくりしてきた僕。しかし、この「信仰」の蓋を取って、

全部吐き出したら、どうなるんだろうか。まるでパンドラの箱を開けるように、僕が抱える問いを本気でぶつけたら、聖書はその問いに敗北してしまっただけで、自分の信仰はガラガラ音を立てて崩れやしないか：。

本当のところ、僕は自分が信じてきたものがポツキリ折れるのが怖くて「神学なんて：。」という言葉を使って、聖書や信仰の事柄に向き合うことを避けてきたのだと思う。

そして、これは僕だけの経験ではないと思う。僕以外のクリスチャン学生だって同じようなことを考えているのではないかと、と主事11年目の僕は思う。

でも、同時に、当時の僕も、今の学生たちも願っている。

聖書がちゃんと僕らの抱える信仰の問いに耐えうることを。いやそれ以上に、その信仰の問いにきちんと応えてくれるのをドキドキしながら期待している。

●NETの役割

NET(National Evangelical Students Training)とは、まさにこの信仰の問いに誠実に向き合い、応えてくれる場所だと僕は思う。

NETは全国主事会が企画する訓練会を指す。昔はこの場所は「全国リーダー訓練会」と呼ばれていた。しかし、「こんなよい学びを限られた学生だけで学ぶのはもったいない！」というので、数年前から150名以上の学生を対象にNETという形でバージョンアップしたのだ。NETは、40名近い主事たちが総出で学生にお仕えする。グループのリードも主事。毎晩24時を超えてまでも学生の相談にのって向き合う主事だっている。「学生主体はどこにいった？」と言われそうだが、この主事会総出の本気の学びを受けた学生はむしろ学生主体をその後で発揮する。つまりNETは、学生主体の骨をつくる場所だといえるだろう。

NETでやっていることは一言でいうと学生に届く神学講座だ。

特に、僕が担当しているストランド1(初めてのNET参加者が学ぶ講座)がそれに該当する。5日間をかけて「神の国」を中心に「聖書全体」を学んでいく。1回の講義は、150分。それを5本と、本気の学びだ。僕もこのストランドに臨むまで、できるだけ多くの神学書を読み、主事会の仲間に繰

り返し内容をチェックしてもらい、原稿はすでに30回以上は書き直している。毎年、毎年「よりよいものを」とアップデートを続けている。それだけ本気で受け取ってほしい学びだからだ。自分が学生時代に聞きたかった、答えてほしかった問いを織り交ぜながら、現代の学生に届く福音の豊かさを毎年、毎年模索している。

NET期間中に、学生たちは御言葉から知識だけでなく、生き方が問われていく。「良き創造」で「自分の存在価値」や「生きる意味」、そして「神様に喜ばれる恋愛・結婚・性」を知っていく。「墮落」では、「罪の現実」に打ちのめされる。罪を具体的に思い起こし、書き留めていく中で、嫌というほど自分の罪深さを知っていく。そして、「神がいるならなぜ？」と上から目線で、神をジャッジしていた自分の高慢さにも出会っていく。「贖罪」では、その自分のどうしようもない罪のためにイエス様が死んでくださった「十字架の恵」に圧倒されていく。「十字架の意味が初めてちゃんとわかりました」という学生も少なくない。そして、それは「救いの確信」へと繋がっていく。この辺りになると学生たちの顔が生き生きしてくる。そして、「終末」においては、いまだに悪がはびこる現実の中で、神様がもたらす確かな「神の国の完成」という終末の希望が確かにあるのだと、学生たちは知っていく。

●この喜びを伝えたい

きちんと御言葉に向き合う5日間の中で、学生たちのか細い信仰の「糸」が、信仰の仲間と主事たちと一緒に学んでいく中で、以前よりも太い「糸」に燃られていく。そしてそれが網(NET)となっていく。学生たちは、御言葉から自分が信じてきたことが間違えではなかったことを知り、「この生き方でいいのだ！」と喜びで顔が広がる。そしてこの福音の網(NET)を携えて、この福音の喜びを、豊かさを「大切な人」に自分の言葉で伝えていきたい！と願う始める。

ちゃんと御言葉に向かうからこそ「この生き方でいいんだ」ときちんと出会える。この生き方に腹をくくって生きることができる。

その本気の問いをぶつけていい場所。それに応えてくれる場所。それがNET。



今、卒業生会に求められる役割

今年度の卒業生会は「交わりを見つめ直す」のテーマを掲げています。卒業生会はこれまで長年に渡り、卒業生の交わりを保つために、たくさんさんのイベントを開催したり、広報誌を発行したりしてきました。しかし、2年前の新型コロナウイルスの流行以後、新しい形での交わりを試行錯誤するなかで、今一度卒業生会とは何かという問いに、現代的な背景を含んで再考する時期に差し掛かっているのではないかと、役員会として考えるようになりました。

卒業生会役員会の大きな役割として卒業生一人一人が励まされる交わりを支援し、促すことがあります。職域別祈祷会や同期会、ブロック・学内ごとの卒業生会など、共通項を持つ卒業生同士の交わりを通して、親密にお互いを励まし合うことのできる場所が継続できるように、微力ながら支援してきました。また、様々なイベントを通して、KGGKスピリットに立ち戻り、お互いを励まし合うことのできる場所を提供し続けてきました。

もちろん、役員会は、これからもそのような役割を担っていきます。しかし、それとともに、重点を置きたいのは、若い世代をさらに支援していくということです。新卒を含む20代の卒業生達の多くは、学生時代にたくさんの交わりによって励まし

合っていたところから、交わりが減少し、特に職場においてKGGKスピリットに生きることを継続する難しさに直面していきま

す。彼らが困難の中でキリストと向き合い、さらに強められて生涯、遣わされた地で福音に生きていく為には交わりが必要ですが、また、コロナ禍で学生生活を送った卒業生の中には、KGGKで交わりをあまり持てなかつた少ない方も多くいらっしゃいます。困難に直面したときに交わりを頼る経験の少なかつた方に、卒業生を通して深い交わりにつながっていただきたいと考えています。

不安や恐れが増していくこの時代で、聖書とは異なる価値観に飲み込まれてしまうことなく卒業生たちが遣わされた地で福音に生きるために、全国で最も多くの若い世代が集まる関東地区卒業生会は若い世代の交わりへの支援に、特に力を入れていきたいと考えています。ぜひ、若い世代の卒業生たち、そして役員のために覚えてお祈りください。



ルーテル学院大18年卒
伊田 準

新卒者歓迎会に参加して

東京医科大22年卒
峰岸 薫

私は今年の4月から大病院で看護師として働き始めました。入職してから感じるのは、とにかくインプットしなければならないことが多いということです。看護をする上で必要な知識や病院の仕組みに加えて、職場の空気を読みながら「良い新人」と受け入れられるために正解を探さなくてはならない気持ちに自ずとになっていきました。そして先輩の顔色を見て、一喜一憂する生活は、KGGKで学んだ「派遣意識」に生きていないように思いました。先輩の顔色伺いに必死になる中で、神様よりも人を恐れている自分に気づき、この先も人を恐れ続けなければいけないと思うととても怖くなりました。いつの間にか毎日病棟に入る前に「神様、今日も何も起こりませんように。」と祈り、人への恐れから御言葉にすがりつく一日を過ごすようになりました。

そのような中で新卒者歓迎会に参加し、久しぶりにKGGKの友人たちの顔を見てとてもほっとしました。

思い通りにいかない自分への葛藤と先への不安を抱えた私に、神様はエレミヤ29:4〜14から語られました。バビロン捕囚のイスラエルの人々に神様は70年かけた約束の地の平安への計画を与えられました。同じように私たちにも主からの長い目で見た「将来と希望のための平安を与える計画」があることを教えられたのです。「今の場所であらゆる丁寧にごしていけばいい」という言葉に、新しい場所で「私」でいられるための居場所を探して焦っていた自分がいることに気づかされました。私が急いで先のことを考え、自分の今の行動と周りの目を不安に思う必要はなくて、神様が持っている計画を信じて、神様を通して人を見て努力すればいいことに、改めて目が開かれました。

最近、「今日も私がするべきことを神様あなたが教えてください。」と祈っています。神様の支配はすべての場所であり、未来にもあることをこの先何度も教えられていきたいです。

卒業生こそ対面の交わりを



ピリットを確認するとき、私たちはもう一度震い立たされるのです。

多くの卒業生にとって、そのような深い交わりをもつのは難しいことです。学生時代のように、日常的にクリスチャンに会うことのできる卒業生はほとんどいません。基本的には、SNSを通して見る他の卒業生の姿は、往々にして「キラキラした瞬間」の切り抜きであり、その背後にあるリアルな生活は見えないことが多いものです。コロナ禍によって利用が広がった Zoom を通してであれば、遠くにいる相手であっても、顔を見つつ、声を通して交わりをもつことができます。工夫次第でより深い交わりをもつことができますし、忙しい卒業生、特に子育て

中の卒業生にとっては、非常に有益なツールですが、複数人で自由に会話をするのは難しく、対面での交わりと比べれば、やはり表面的にならざるを得ません。

コロナ禍が少しでも収まり、同期会や職域別、地区規模の卒業生合宿、ファミリーキャンプなどがもたれていくことを心から願っています。もちろん、様々な状況のなかで、合宿への参加が現実的ではない卒業生もいらっしゃるでしょう。それでも、卒業生同士の小さな、個人的な、そして出来るだけ長時間の交わりが対面でもたれていくことを願っています。対面でこそ、交わりは深まるからです。そして、深い交わりのなかでこそ、思い起こすことができる使命があるのです。

7月にもたれた全国卒業生会代表者会議はハイブリッド（対面・オンライン併用）開催でした。久しぶりに対面での合宿を経験して思ったことは、交わりの「深み」が全く異なるということです。

もちろん、対面であっても、まずは表面的な分かち合いから始まります。しかし、長時間顔を合わせ、寝食を共にし、プログラムの合間での何気ない会話や、グループでの分かち合いを重ねることで、徐々にそれぞれの失敗談や、痛みを満ちた経験が正直に分かち合われていきます。それは学生時代の光景であり、そのような深い交わりのなかで、もう一度 KGK ス



唄野 絢子

○最近、相手に言えてなかった一言は？
あなたが6歳の頃から、やがて大きくなら読んでほしいと書き続けたもの、いつか読んでね。特に私の結婚までの経緯の中に表された主のご真実を知ってほしい。

○相手を聖書の人物に例える？
ルツカナ。姑のナオミの信仰に敬意をもってのこと。神の前でのやさしさ、素直さ、従順さ、そして喜んで働く姿が似ているかな。

○相手と過ごした大切な「時間」は？
今一番聞いて欲しいこと、祈って欲しいことを語ってくれ、私の話にも心と耳をしっかりと傾け、共に主を仰いで折り合えたとき。

○相手がいることで「助かってるなあ」と思うことは？
世代の違いで話の内容・スピードなどについていけず取り残されることが、橋渡しの役をしてくれること。

家族のかたち



菅家 芽生

○最近、相手に言えてなかった一言は？
小さい時は、あまり会えない少し遠い存在だった。手紙でのやりとりが中心だったから、未だに敬語が抜けない。けど、もっと交わりたい！

○相手を聖書の人物に例える？
マリアかな。思い巡らし、大切なことは心に留めている姿勢が重なる。夫ヨセフと二人で一つというイメージも。

○相手と過ごした大切な「時間」は？
唄野家で美味しい食事やお菓子とともに、おばあちゃんの出会って来た人の物語を聞く、一つ一つの時間。

○相手がいることで「助かってるなあ」と思うことは？
信仰者として、夫に仕える女性として、交わりを慈しむ人として、模範となる人であること。そして、いつでも全身全霊で迎えてくれること。

孫	菅家 芽生	祖母	唄野 絢子
	千葉大 21年卒		日本女子大 60年卒
教会	OMF ザ・チャペル ・オブ・アドレージョン	教会	堺大浜キリスト教会
仕事	公立小学校教諭	仕事	主婦
家族	父・母・妹 (M1) の4人家族	家族	主人 (隆)、4人の 子ども、8人の孫と 2人のひ孫
趣味	バドミントン 感動系ドラマの視聴	趣味	手紙書き・賛美すること・ お花の写真を撮ること
好きな食べ物	トムヤムクン 抹茶アイス	好きな食べ物	和菓子・抹茶アイス

早矢仕宗伯



H. Hirotaka

奈良芸術短期大学 1988年卒業
1993年より日本福音自由教会の牧師として埼玉、東京で牧会。2017年「New Creation Arts Movement イエスの風」を立ち上げ牧師画家としての活動を始める。

Theology of Work 仕事の神学

わたしは神から何を任されているのか
神の世界において何のプロフェッショナルとして召されているのか
キリスト教の視点でわたしたちの仕事に「神学」するリレー連載



Professional 画家

早矢仕宗伯にとって「画家」とは ———— 福音を言葉ではない言葉で証する

「数年前、私の奥さんが突然亡くなってしまって……」日曜日の夕方、ある教会に作品を展示させてもらっていた時、一つの作品を観ながら、彼は語り始めた……。彼は、悲しみに暮れる中で、不思議な体験をした。奥さんの愛を味わい、神の慰めを感じる幻を見た。「この作品を観ながら、その時のことを想起こした……」彼の話を聴きながら、共に神の深い憐れみに触れ、心が震えた。

アートは、不思議な出会いをもたらしてくれる。一つの作品を前に、お互いが感じたことを自由に語り合う。作品が、その人の心の深い所にある何かに触れる。言葉にならない思いに気付かせる。心を癒し、慰め、解放する。言葉で上手く説明出来ないが、言葉を越えた世界の現実に目を向け、触れられる経験へ導く……。

神が創造された世界は、言葉で表せないほどの長さ、高さ、広さ、深さを持っている。僕らが知っている以上に豊かで

美しい。神は、今日という日を、勿体ないくらい贅沢に、美しく飾っておられる。それらは、言葉では表現しきれない……。神の美しさ、愛、憐れみ、慰め……を表し、分かち合い、味わうために、言葉ではない言葉が必要だと思う。

牧師画家になった僕は、沈黙の説教をする。神の美しさを、色やかたちで表現し、分かち合う。目に見えない神の現存を感じ、味わってもらうために。

福音は、神の美しさを観、味わい、表し、自ら美しく生きること。福音が口先の言葉にならないように。福音は、知的に説明されるだけでは不十分であり、体験し、味わうもの。全身全霊で受けとめ、生きるもの。福音は、見える。僕らが表現して見せるもの。僕らは、福音に生きる者たち。福音を味わい、福音に生きる。僕が描く理由は、ここにある。僕は、作品を描くプロセスにおいて福音を味わう。描きながら、イエス様の美しさを観て、味わう。描くことは、祈り。憐れみ深いイエス様の懐に身を委ね、導

かれること。心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、神、主を愛し、隣人を自分自身のように愛すること……。僕は、魂を削るように作品を描く。自分の技術が追いつかず、苦しくて筆が止まる時がある。それでも、イエス様の美しさ、慈悲深い愛を表すことが出来るようにと願いを込めて描く。

僕は祈る。描かれた作品がイエス様との出会いになるように……。作品が、そして自らが、沈黙の説教となり、今も生きて居られるイエス様の現存を表すものとなりますように。



現在、説教者として諸教会で奉仕しつつ、「アートは福音」をテーマに掲げ、描いた作品を持参し、全国の様々な教会やイベント、個人宅にて展示する機会を通して福音を分かち合っている。2021年より上智大学グリーンケア研究所にて学びを始め、さらにアートの可能性と活動の領域を拡げよう準備中。

『魂をもてなす 霊的同伴への招待』

中村佐知 著、あめんどう、2021年

紹介者 ホアン美由紀(旧姓浅田)
元KKG主事

私が霊的同伴のことを初めて聞いたのはもう10年位前のことですが、当時はあまりピンとこなかったことを覚えています。それから年月が経って私自身が霊的同伴を受けるようになり、霊的同伴とは、訓練を受けた同伴者と定期的(私の場合は2週間に1回会い、)その2週間の間にあった出来事の中に神様の臨在や働きに気づいていくことで、神様との関係を深めていくこと、自身もキリストに似た者へと変えられていく「スペース」を作っていくことなのだあと分かってくれました。霊的同伴の「ピンと来なさ」は、耳新しいということもありますが、その奥深さや幅の広さによるところや、体験的なものであるところから来ているのかもしれない。

中村佐知さんの「魂をもてなす」霊的同伴への招待は、霊的同伴についてはもちろん、霊的同伴の基盤となる観想的な霊性、そしてそもそも「霊性とは何か」について説明してくれています。しかし、知識だけでなく、霊的同伴の中で扱う神様との関係性や、神様についての見方を具体的な例話を通して読むことができそうです。「招待」という副題の通り、霊的同伴の世界に招き入れてくれる一冊です。



ブックレビュー



関東地区主事 山形宣洋

担当 KGK関東地区副責任主事、池袋ブロック担当
所属教会 鳩ヶ谷福音自由教会



私 が先日伺わせていただいた教会で「KGKに期待しておられることは何ですか?」と牧師先生にお尋ねしました。すると先生は間髪入れずに、「伝道することへの動機づけです」と答えられたのです。近年、KGK内外において、「KGKは伝道が弱いのではないか?」と、ご指摘をいただくことがあります。事実、2021年に学生宣教局が算出したデータによると、KGKの活動に参加する未信者の学生は、全体の13%を記録しており(コロナ禍に入ってから約3%減)、「伝道が弱い」というご指摘は的を射ているように思います。では、KGKが今後、より伝道へと向かっていく運動・団体となるためには、どこから始めていったらよいのでしょうか。

祈りから始まっていく伝道

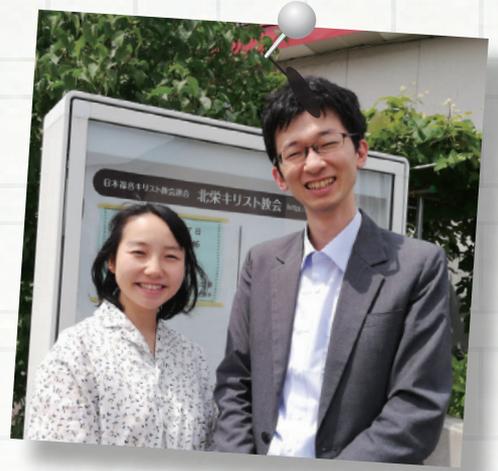
学生と接する中で感じることは、彼らが、自分自身のことと精一杯である、ということ。学業、バイト、教会・KGKでの奉仕。祈祷課題に挙げられるのは、どれも自分に関するものばかりです。そのような中で私は、「伝道へと向かっていく祈祷課題が少ないことを憂えています。もしかすると、救霊への思いはありながらも、「今の自分には伝道する余裕などない」と思っているのかもしれない。しかし、余裕がないのは学生だけではなく、卒業すると、学生の時以上に、時間的にも、精神的にも、余裕がない日々を過ごすことでしょうか。そうなる、これからも伝道から遠ざかっていく人生を歩んでいくこととなります。

「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くて悪くてもしっかりとやりなさい。(IIテモテ4:2)」パウロが若い牧会者テモテに書き送った言葉です。テモテが牧会していた教会では、異端的な教えを説く者がおり、その他にも、牧会上の様々な問題によって疲れ切っていたテモテがいました。パウロはそのようなテモテに対し、「これからは水ばかり飲まないで、胃のために、また、たびたび起こる病気のために、少量のぶどう酒を用いなさい。(Iテモテ5:23)」と勧めるまで彼のことを気遣うのです。けれども、テモテが自らの牧会のことと精一杯となり、伝道に相応しくないと思える「時」があったとしても、それは

伝道しないことへの理由とはならないと、パウロは力強く言い抜きます。学生も、伝道しないことの理由を探せばいくつでも思いつくでしょう。しかし、それらは究極的に、伝道しないことへの理由にはなりません。キリスト者として召された以上、私たちは伝道に生きるのです。では、どのように伝道することができるのでしょうか。

私が思う一つの可能性は、「祈ることから始める伝道」です。救われて欲しいと願う○○さんのことを覚えて、自らも祈り、また、KGKの仲間にも祈ってもらおうのです。伝道を意識した祈祷課題を一つ加えるところから、私たちの伝道は始まっていくのだと思います。KGK元総主事の大嶋先生がこのような言葉を残されました。「大きく祈り、小さく始めていく」。まさに、伝道こそがそうだと思うのです。救いは神様の領域です。だからこそ、私たちは神様に大きく祈りながら、神様に示された伝道へのチャレンジを、小さいところから始めていきたいのです。チャレンジには勇気が要ります。だからこそ、KGKが交わりを通して励まし合い、祈り合いながら、より伝道することへと向かっていく運動・団体でありたいのです。そして、まずは卒業生である私自身が、救われて欲しい友人のことを覚えて学生たちに祈っていただくところから始めていきたいと思えます。

あの主事からの てがみ



- ▶ 趣味 読書・ガーデン巡り
- ▶ 学生時代の専攻 分子生物学
- ▶ 性格 マイペース
- ▶ マイブーム 朝活

北栄キリスト教会牧師
元関東地区主事

中西健彦



こんにちは。私は、札幌にある JECA 北栄キリスト教会で牧師をしている中西健彦と申します。北海道の大学を卒業した後、関東地区で3年間 K GK 主事として働き、その後4年間神学校(聖書宣教会)で学び、再び札幌に遣わされています。現在は、妻と2人の娘(2歳と0歳)と暮らしています。牧師は主事よりもルーティーンのある仕事ですが、結婚や葬儀においてそれぞれの人生に深く関わったり、神学的視点に基づいて教会の営みに必要な判断をしたり、牧師ならではの働きも刺激に溢れています。今年も教会員の紹介で、未信者の方へのオンラインでの聖書の学びも行いました。画面越しに出会った方が受洗へ導かれていくのも、現代ならではの形でしょう。何より、毎週のみことばの宣教に、いのちをかけて取り組む日々です。

先日は東京に出張した際に、私と K GK との関わりを象徴するような3名の方との再会がありました。

お1人目は「元同僚」である T 本主事。T 本主事とは、3年間同じ関東地区で主事として働きました。キャラクターとしては真逆のタイプですが、だからこそ互いに良い刺激となり、足りない部分を補い合いながら切磋琢磨してきた同志です。そんな同志が、今なお学生宣教の最前線におられることは、それ自体が私にとっての励みであり、労苦も分かち合う良いひとときとなりました。

お2人目は「元上司」の O 嶋先生。新米の説教の経験もない私に、学生にみことばを語るイロハを叩き込んでくださったの

が O 嶋先生でした。主事1年目、主事会の説教演習で粉々にされた経験が、今の自分を形作っています。今回は H 教会の礼拝に出席させて頂き、講壇から語られるみことばや牧会のお姿から、新たに教えられる機会となりました。

最後は主事時代の「教え子」である Y 村くん。彼も私の母校である神学校で学んだ後、今は同僚の牧師として遣わされて、学びや教会のことなど、色々と分かち合いました。主事としての働きを振り返ると、当時とはとにかくがむしゃらで、恥ずかしく、反省すべきことも多々あります。ただ、かつて関わった学生が、このように献身していく姿に大いに励ましを受けました。

主事の働きを離れて、もう7年以上過ぎましたが、当時与えられた出会いは私にとってかけがえのないものです。現在は、学生伝道から教会に働きの場を移しましたが、かつて震える思いで語った説教体験

や、学生・卒業生・主事たちとの関わりが、今の自分を形作る原点となっています。これからの牧会でも、かつての経験や出会いが活かされていくことでしょう。札幌にお越しの際は、どうぞお立ち寄りください!

